

挑む!

駄菓子屋「北原商店」店主

北原 妙子さん(38)

「友達の家」感覚の場残したい



京都市上京区の住宅街。年季の入った町家の引き戸をがらがらと開け、靴を脱いで上がり込んだ先、6畳の和室が「商店」だ。数十種類の駄菓子が並び、ちゃぶ台もテレビもある。だって、普段はこの町家に住む店主と夫が居間として過ごす場所なのだから。

「子どもたちが友達の家遊びにきているような感覚を大切にできなかったんです」。営業は土、日の午後だけ。

美大生の時、大学のそばに駄菓子屋があった。老いも若きも会話が弾む場

横浜市出身。古い建物が好きで、町家暮らしを選んだ。お気に入りの駄菓子屋は、口の中ではじけるキャンディー「パチパチパニック!」。

に魅力を感じ「私も」と口にする、店主に「収入が多くはない」といさめられた。東京の大手おもちゃメーカーへ就職し、企画開発の仕事にやりがいを感じても、思いは消えなかった。

「大好きな京都で駄菓子屋を」と引っ越し、転職。平日は会社員として働きながら、昨年3月にひっそり店を開くと、小学生の口コミの力で客が増えていった。

やはり、利益は大きくならない。それでも、駄菓子屋という場所を残したいと願う。「大人には喫茶店も居酒屋もあるのに、子どもがいたら楽しめる場って、意外とないんです」。海外で展開する？ 子ども向けのマーケティングの場として生かす？ 客の笑顔を見ながら、残すため、増やすための商機を探る。

◆ 次回は11月17日に掲載予定です。

文・写真 松尾由紀

記者から

駄菓子屋は、小銭で笑顔が生まれる魔法の場所。生き残るすべ、ぜひ見いだしてください!